

## 国際シンポジウム「ドイツ・日本・ロシア—未来へのチャンス」(東京)

世界平和研究所は、2011年10月7日(金)、ベルリン日独センター、コンラッド・アデナウアー財団との共催により、日本財団の協力を得て、「ドイツ・日本・ロシア—未来へのチャンス」と題する国際シンポジウムを開催した。本年は、日独修好通商条約が締結されてから150周年の節目の年であり、本シンポジウムも「日独交流150周年」記念事業の一環である。

本シンポジウムは、ドイツ、日本、そして両国にとって重要なパートナーであるロシアを取り上げ、外交、エネルギー・天然資源、安全保障等の分野の将来展望について、公開シンポジウムにおいて各国を代表する有識者が議論し理解を深めるものである。このため、ドイツ、ロシアから政治家、研究者を招聘するとともに、日本からも当該分野における専門家の参加を得た。全て公開で行われ、在日ドイツ大使、在日ロシア大使を始めとする、100名超の聴衆が見守る中、パネリスト間の活発な意見交換が行われた。

冒頭で、F.BOSSE ベルリン日独センター事務総長、J.WOLFF アデナウアー財団日本事務所代表、佐藤謙世界平和研究所理事長からそれぞれ挨拶が行われ、引き続き、U.BRANDENBURG 駐露ドイツ大使、都甲三井物産戦略研究所特別顧問(元駐露大使)から、基調講演が行われた。BRANDEBURG 大使は、「欧州、アジアの戦略パートナーとしてのロシア」と題して、独露関係の過去と現状、ロシアとアジアの将来の可能性についての考えを述べられた。また、都甲大使からは、「日露関係の展望」と題して、主に第二次大戦後の日露関係、独露関係の違いについて考えが述べられた。



パネル1「ドイツ、日本、ロシアの関係—強みと弱み」においては、ロンドン大キングスカレッジ客員教授を務める F.PFLUEGER ベルリン市議会議員(元独防衛政務次官)の議長の下、ドイツからは A.SCHOCKENHOFF 連邦議会議員(与党外交・国防・EU政策副院内総務)、ロシアからは M.NOSOV ロシア科学アカデミー欧州研究所研究次長、日本からは都甲大使の3名のパネリストによるディスカッションが行われた。まず、

SCHOCKENHOFF 議員より、「信頼可能なパートナーシップ構築のための独露協議」と題してプレゼンテーションが行われ、引き続き、各パネリストが発言し、独露間、日露間の歴史を振り返るとともに、両国間に横たわる課題について議論した。また、聴衆との間で盛んな質疑応答が行われた。



パネル2「エネルギーと天然資源」においては、北畑隆生世界平和研究所副理事長(元

経済産業事務次官)の議長の下、ドイツからはJ.PFEIFFER 連邦議会議員(与党経済政策スポークスマン)、ロシアからはM.ENTIN モスクワ国際大学欧州研究所部長、日本からは岡素之経団連日露経済委員会委員長(住友商事会長)の3名のパネリストによるディスカッションが行われた。まず、ENTIN 部長より、「天然資源は、対立問題か外交政策の好機か?ロシアの日本、欧州との関係について」と題してプレゼンテーションが行われた。引き続き、各パネリストが発言し、ロシアの有する天然ガスを中心としたエネルギー資源の開発・利用において、各国が如何に協力していくべきか、活発な議論が行われた。

パネル3「東アジアの安定・日本、ロシア、欧州の共通課題」においては、東京大学教授の北岡伸一世界平和研究所研究本部長の議長の下、ドイツからはF.PFLUEGER ベルリン市議会議員、ロシアからはG.TOLORAYA「ロシアの世界」基金地域プロジェクト部長兼アジアアフリカ部長、日本からは風間直樹参議院議員の3名のパネリストによるディスカッションが行われた。まず、風間議員より、「独露関係と東アジア 欧州のパワーバランス変化が東アジアに与える影響」と題してプレゼンテーションが行われた。引き続き、各パネリストが発言し、中国の台頭、北朝鮮問題等の東アジアの安定に大きな影響を与える諸課題について論じるとともに、日本ーロシア間のパートナーシップの重要性について話し合われた。また、聴衆との間で盛んな質疑応答が行われた。



閉会式においては、S.FRIEDRICH アデナウアー財団アジア太平洋部長が主催者を代表して挨拶を行い、一日のシンポジウムを終えた。

以上

参考資料：プログラムと略歴